新座市観光ボランティアガイド協会設立１５周年

記　念　講　演　会

演題『小林一茶と たどる 草津道』

２０２３
１１月５日（日）１３：３０～１５：００（１３：００開場）

ふるさと新座館ホール（新座市野火止６－１－４８）

時は文化五年（１８０８）、
一茶は草津への途中、新座郡へやってきました。

もっと一茶を知りたくありませんか。

宮瀧 教授

■講　師：大東文化大学教授　宮瀧交二
■定　員：１００名（但し、中込不要）
■問合せ：新座市シティプロモーション課
新座市観光ボランティアガイド協会事務局
（☎０４８－４２４－４６８６）
■主催：新座市観光ボランティアガイド協会

詳しくはこちら
（市産業観光協会HP）
↓

小林一茶について

江戸時代の三大俳人は、俳句の世界で多大なる功績を残した人物三人です。その三人とは、「松尾芭蕉（１６４４年－１６９４年)」「与謝蕪村（１７１６年－１７８４年)」、「小林一茶（１７６３年－１８２８年)」です。

特に、一茶は「雀の子　そこのけそこのけ　お馬が通る」、「めでたさも　中くらいなり　おらが春」等の庶民らしい親しみのある作風で生涯約２万にもおよぶ句を残しております。

一茶は越後境に近い信濃国（長野県）柏原村に生まれました。幼くして母を亡くし、その後、一茶が８歳の時に父親は再婚します。しかし、継母になじめず１５歳で江戸に奉公に出ることになります。奉公先を転々としながら、２５歳になった頃、葛飾派の二六庵竹阿（にろくあんちくあ）に学んで俳諧の道へ進みました。初めは色々な俳号を名乗っていましたが、やがて俳号を「一茶」としました。

そして３０歳から３６歳まで、俳諧修行のために関西、四国、九州を渡り歩きます。その後、一茶の俳諧に対する世間の評価は高まっていましたが、私生活では３９歳で父を亡くし、継母とその子（弟・仙六）との財産争いが続くなどの気苦労がありました。

その一茶は、文化五年（１８０８）４５歳の時に、江戸から故郷信濃国へ帰郷する途中、草津の友人のもとを訪ねます。その折に書き綴った旅日記「草津道の記」には、立ち寄った野火止の素朴な情景等を詠んだ貴重な句も記されています。

→以上「俳人一茶（小林計一郎著)」＆「新座市にいざ見聞録」一部抜粋

今回の講演会では「草津道の記」に基づき、特に現埼玉県内の一茶の足跡を大東文化大学 宮瀧交二教授が楽しく分かりやすくお話をして下さいます。

是非皆様のご来場心よりお待ち申し上げております。

新座市観光ボランティアガイド協会より